

## 熟年者の余暇活動に関する研究

○藤本淳也（大阪体育大学スポーツ産業特別講座研究員） 原田宗彦（大阪体育大学）

### 余暇活動 熟年者 縦断的研究

#### 1. 緒言

わが国は、世界一の長寿国となっただけでなく、高度の高齢化社会を迎えようとしている。現在の高齢者（65歳以上）人口の割合は総人口の12.5%で、西暦2000年には16.9%、そして西暦2020年には25.2%にまで増加すると予測されている。また、一方では、高齢者の余暇活動に対する関心が高まり、参加者も増加傾向を示している。

高齢者のレジャー・スポーツ参加に関する研究は、これまで多くの研究者の注目を集めてきた。例えば、スポーツ社会学の分野においては「社会化」あるいは「再社会化」として、その参加メカニズム解明の試みがなされている。また、このような研究は、マネジメントやマーケティングの分野においても大きな関心事となってきた。すなわち、巨大化する高齢者層は、レジャー・スポーツ産業にとって大きな需要を生み出す潜在マーケットであり、その欲求やニーズの変化を把握することは、ひじょうに重要と考えられるのである。

しかし、これまで高齢者の余暇活動参加に関する研究は、ある特定のライフステージに注目した横断的な研究が多いのが現状である。今後は、同回答者あるいは同世代を対象とした2時点以上の調査に基づいた縦断的研究が望まれる。本研究は、「退職」というライフ・イベントにともなう余暇活動の変化を縦断的に分析するための第一次調査（事前調査）として、過去、現在、そして将来の余暇活動の実態と意識を調べたものである。

#### 2. 目的

本研究は、退職を目前に控えた熟年者の過去の余暇活動参加パターンや現状、そして、将来の活動への参加意識を明らかにすることによって、日本人の余暇活動パターンの推移

に関する基礎的資料を得ることを目的とする。

#### 3. 研究方法

本研究におけるデータの収集は、大阪府の大手電気会社に勤務している退職前の社員（50歳～60歳）の男女40名を対象に、1991年3月2日、集団面接による質問紙調査によって行われた。調査内容は、過去、現在、そして将来の余暇活動について、それぞれ活動種目と実施時期、活動種目と活動頻度、今後行いたい活動種目とその障害となる要因などによって構成された。また、過去の余暇活動経験を把握する新しい方法として、これまで行ったすべての余暇活動の開始時期と終了時期を視覚的に表現してもらい、活動の変化パターンの図式化を試みた。

#### 4. 結果

図1、図2は、過去の余暇活動の「社会化一継続パターン」例と将来の参加希望種目を示したものである。図1では、10歳代前期から現在に至るまで、五つの種目を通して余暇活動を継続してきている。また、その間に複数の活動を平行して活動してきた時期があることが特徴といえる。図2は、20歳代前期から現在まで、4つの活動を通して余暇活動を継続してきたことを示している。しかし、ここではひとつの種目を一定の期間毎に代替しながら継続して活動してきたことがわかる。このように、同じ「社会化一継続パターン」においても、種目数や継続方法にいくつかの異なったパターンがあることが明らかになった。また、将来の余暇活動については、両者とも現在の活動は継続していくと答えているが、図1の場合は今後も複数の活動を平行して行いたいという希望をもっていることがわかる。

図3、図4は、過去の余暇活動の「再社会化パターン」例と将来の参加希望種目を示し

たものである。図3では、10歳代中期から三つの種目を行ってきたが、20歳代後期で活動を止め、そして40歳代中期から再び一つの種目を始めて現在まで継続していることを示している。また、図4では、10歳代前期から現在までの間に四つの種目を行っているが、その間に活動を行っていないふたつの時期が存在したことがわかる。このように「再社会化パターン」においても、活動を中断してしまう時期や回数が異なる場合があることがわかった。また、将来の活動については、両者とも現在の活動に加えて新しい活動にも取り組みたいという希望を持っていることがわかる。

図5は、過去の余暇活動の「社会化-離脱パターン」例と将来の参加希望種目を示したものである。30歳代前期に始めた活動を30歳代後期中止し、その後活動を行っていない。また、図5の場合、将来も具体的な活動希望は示されていない。

現在の余暇活動としては、園芸・庭いじり(55.0%)や読書(47.5%)、国内旅行(45.0%)などが多く、また、全体の77.8%が退職後に余暇の過ごし方が変化すると考えていることがわかった。具体的には、「現在の余暇活動を続け、新しい余暇活動も始める」が56.0%、「現在は何もしていないが、昔やったことのある余暇活動を始める」が24.0%、そして「現在の余暇活動をそのまま続けるが、場所や仲間が変化する」が16.0%であった。

以上の結果から、本研究で試みた過去の余暇活動とその開始・終了時期を図式的に記入する方法によって、余暇活動参加パターンがより簡潔に把握することができた。そして、主に「社会化-継続パターン」、「再社会化パターン」、「社会化-離脱パターン」の三つのパターンが示された。また、退職というライフ・イベントが余暇活動の変化に影響を及ぼす可能性が大きいことが推察された。発表当日は、そのほかの結果を詳しく報告するとともに、縦断的研究の方法論に関する問題点について考察を加える。

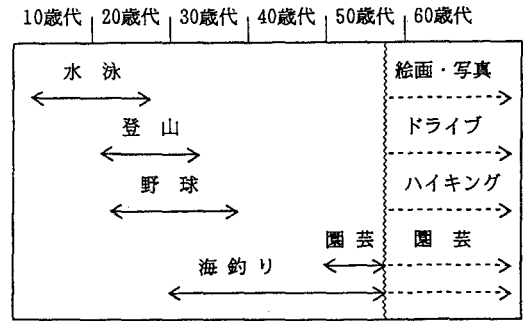


図1. 余暇活動の社会化-継続パターン例と将来の活動(1)

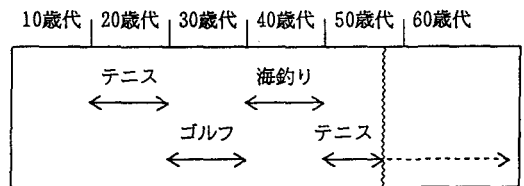


図2. 余暇活動の社会化-継続パターン例と将来の活動(2)

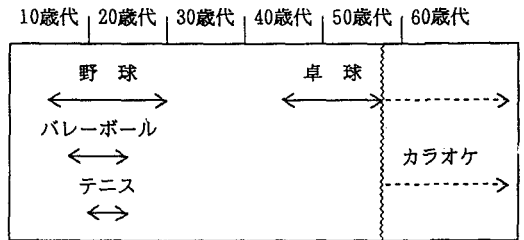


図3. 余暇活動の再社会化パターン例と将来の活動(1)

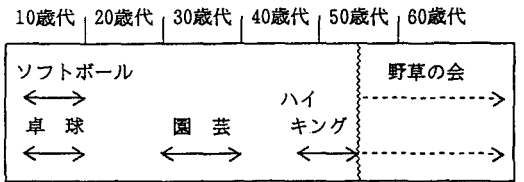


図4. 余暇活動の再社会化パターン例と将来の活動(2)

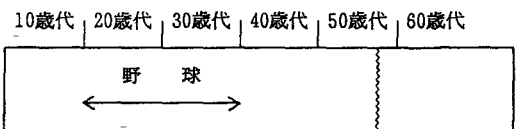


図5. 余暇活動の社会化-離脱パターン例と将来の活動